

メディア 激変

217

どうなる地デジ ⑥

大都会の高齢者団地で

平日の夕方だというのに、人影がほとんどない。2千を超える世帯が暮らす東京・新宿の都営戸山団地。連なる建物の間を吹き抜けていく風が、いっそう冷たく感じられる。

「人がいないのは寒いからじゃない。いつもこうなんだよ」。そう話す本庄有由さん(72)が住み始めた10年余り前は、町内会の花見に千人も集まった。今は住民の大半が65歳以上。この1年に3件の孤独死が起きた棟もある。役員のない手がなくて自治会も解散してしまった。

総務省の都中央テレビ受信者支援センター(デジサポ東京中央)が昨年末、ほぼ全戸を訪ねて地デジ化の進み具合を調べた。約半数から回答が得られ、地デジ化を終えた家庭は75%にとどまっていた。都がアンテナを立て、「外側の」対応は終わったが、室内のテレビがアナログのままの家庭が25%。その半分弱が、今後も地デジ化の予定はないと答えた。

NPO法人を立ち上げて高齢者の孤立を防ぐ活動をしている本庄さんは「今はテレビが見られるから、みんな全く関心がないんですよ」。



都会の限界集落と呼ばれることもある都営戸山団地＝東京・新宿

自身もまだ、アナログのままだ。こうした「内側」の地デジ化にまで手をかける余裕はデジサポにもない。貸主が対応しないなどの理由で、「外側」の地デジ化さえ終わっていない恐れがある集合住宅が、東京23区内に4万6千棟も残っているからだ。

デジサポは1月末から「大ローラー作戦」を始めた。地元のケーブル局とも協力し、毎日30人ほどの担当者が集合住宅の持ち主を訪ね、地デジ化状況の聞き取りをする。担当者の一人、石崎淳一さん(48)は17日、明治神宮に近い渋谷区内の市街地を歩き回っていた。

「〇〇さんのお宅ですか？ 違いますか。それは失礼しました」

登記簿上の持ち主は引越したようで、別の人が住んでいた。「東京でも渋谷のような場所は特に流動性が高い。登記簿の情報が古くて会えないということがよくある」と石崎さん。

500軒ほど歩いて、次の家へ。今度は留守だった。訪問の趣旨を書き、連絡をくれるように頼む「連絡票」を郵便受けに入れた。

こうして毎日20軒ほどで約3万歩。持ち主がわからない場合は直接物件に行き、住人や近所の人に聞いて探す。土日も交代で出勤だ。

デジサポ東京中央の太田俊明次長は言う。

「地デジ難民が出るとすれば、持ち主が何も対応をしない小規模な集合住宅に住んでいて、人付き合いのない経済的弱者でしょう」

それを防ごうと、都会の片隅で気が遠くなるような地道な作業が続いている。(田玉恵美)